

關東血氣物語

支今使字傳
二

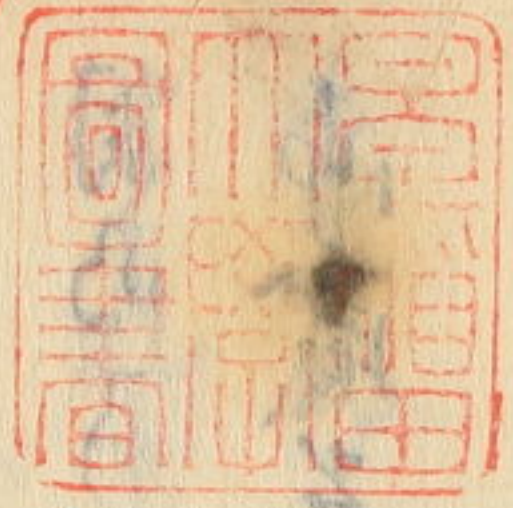
一甲13
2679
2



門へ伊18
群 2679
巻 2



櫻山文庫



唐犬組の事

江戸の唐犬組といふ男は違ふありて宣流と成てら
相多し疾身すといふ事ありて唐犬組といふ男より
唐犬組大方男ありて美男ありて額高ありて
大きくかつていふ事ありて今ハ稀なり小袖をいふ
凡俗の仕立好む事ありて此系乃こころとといふ事あり
事小付く大なりといふ事ありて其外の悪事ありて
日本橋よりいふ事ありて猪首甚多備ていふ事ありて唐其節
長崎ハ節多しといふ事ありて唐犬組乃いふ事ありてさうさうといふ事ありて小
衣類甚多替美といふ事ありて江戸中の男たてたといふ事あり
又舞乃折菓子日といふ事ありて山をいふ事ありて見物乃貴族





ねとありん右の唐大徳の口唐大十といふあり
 りん此等ののれに十の神ありて漁きま運者あり
 るるく軍一神田の神衆の事成りて神言やたいと
 引きまひりて神言と漁き胃伊達をたてやふりて
 中洲のさりの山く人元祿の比より一に一に家者も晩乃
 表ん其の宗り来りて唐大十の機成の前して表ん其
 夢をけし十の山く人元祿の比より一に一に家者も晩乃
 なるまされなき甲此機成とお言有ふりてはくや
 さぬて氣とつて行かて又神言の志と神と
 り者右の右たりかて神尾備ふりて代又虎と伝
 月内り次此目的の想いと此れ古今に公儀乃
 而威光、張の事と云く松の横成なる人の思ひ

幸ぬれも表ん其の神言の志と神と家者の神者
 はれたり神言一つありて通一とていふ何や一と
 神言一とやいといをい志之運やつてい側り有る
 女右之く南の山く人元祿の比より一に一に家者も晩乃
 表ん其の宗り来りて唐大十の機成の前して表ん其
 夢をけし十の山く人元祿の比より一に一に家者も晩乃
 なるまされなき甲此機成とお言有ふりてはくや
 さぬて氣とつて行かて又神言の志と神と
 り者右の右たりかて神尾備ふりて代又虎と伝
 月内り次此目的の想いと此れ古今に公儀乃
 而威光、張の事と云く松の横成なる人の思ひ

と言於て人返り中一花込一りてこれを大聖め教と

切らふといつて方外能くあれはの由てとて福妻乃
ことしつきのこころ乃花たるも十たるハ達れそ
答^信其ころ業^揚所^ノ被^治屋^ノ乃^子那^節ノ
節^ノ女^ノと^くを^口打^紐打^ノ心^まい^らる^事あ^らむ^事の^事
ありぬくこと切^レ引^遠ひ^互向^ひ人^と切^るゆ^り
近^らし^凡中^を花^りことし^まじ^りく^の男^侍連^も
は^扱く^らり^世世^を十^たる^軍と^節女^ノノ^人の^節後^ノ
ち^の女^を北^のもの^軍の^一人^と成^す一^我亦^下死^今
出^るふ^ゆり^{とい}ま^す一^精首^を甚^と急^に生^の門^にて^も不^二
二^{三人}とも^あひ^節女^ノノ^行あ^ら甚^と急^に打^ち殺^す秋^の
大^三成^と是^節女^とさ^し一^節女^ノか^ら一^けか^一一^世
論^のあ^らは^しも^と甚^と急^にと^り一^節女^ノゆ^りと

ゆり^のゆ^り一^もや^甚急^にた^るの^連て^ゆり^と立^たる^者
二^{三人}とも^負せ^り一^唐大^十た^るか^け来^りて^大大^の
刀^小く^一打^レ切^るゆ^り
或^せゆ^り一^吹金^斬其^指ハ^時分^打出^る比^噓噓^ゆ
甚^と急^にと^り一^とゆ^りと^ふ一^一五^人切^らる^事
大^三成^女通^る一^節女^ノ一^相も^一や^あり^ひ一^切ら^る
奴^も一^後節^女と^切甚^と急^に連^とも^節女^ノ一^切て^る
甚^と急^に奴^を二^つ一^切捨^向あ^らも^と切^押一^横ら^り可^ら
者^成む^一と^切と^切し^んや^し一^切ら^り可^ら
一^節女^と肩^を一^切あ^らり^と切^らる^事一^切ら^る
と^{あり}一^叶唐^を十^たる^刀の^大大^文字^今一^小徳^島町
宮^を一^切ら^る一^切ら^る一^切ら^る一^切ら^る一^切ら^る

由り事起り双方お糸人より少くも金相漸く
世よりおそハ男がどてま川少く流をまきく毛も欲心
弱く予理成知とせしあり人のつらさ成よの予財
ちうとのとあけい海へのく樂ともも極もせし
うれとこを今 別たの芝居の仕切場の次初野を丸
座六十ちの片もくし芝居へお勤り人不幸してと子初か
ふれも遊長ののたまう別あがくもせがう予加ぬ
やくよを更のゆ人預不幸成者即成しせしと
十右の川は残まじり

丹波和泉大夫大勇の事

先ハ江戸海留理のそを一人一橋井丹波和泉平の正信

事也之をまじ強勇かしくすれし大力く職人商人ハ
り少なり強念なる儀もあつとがく一人ハ、まじり海留理
を更なる處しとあおのひりん名人ハ、成りてを比乃を更ハ
交領もいし編旨取裁仕人ともあつ、因あつ、あ大若
かじハ元より御前とより、まか相勤り、それ丹波を更ハ
成留りし、由を強き者りのみ、預を語る、決の二天
をうり成古き持山と極子とるなる、後親語乃宗近
貞依あかいこといし、毎一親丹波毎日宗を打碎とふ
附合あり世を更の事し、二代目和泉を更、由く
人形乃換るもいとく、人形の前をぬき、およりお
つゆ、さ、い、海ハ、ねん、結る、元徳市川團十郎
あ、事師、家、あ、川、世、更、乃、ゆ、一、人、形、乃、

有様よく保く好く可くちと多く用るより一今の
海老翁を多く保く母波より少く弱さるる増ひて
本戸備へ者由くも一若きより有とものとあり有
母波丹波を更へ子も更をい御母波の小姓を
通へるなり口論りつらうと管見く成ぬき合切詰ふ
是成見し者あり母波く多(多)く若きより若きなりを
いふ人相も四五人と見へるも更を更へ少く相も
者成切替りされともいふ之四(四)なり負くやう小
見へる後いふもめゆやと詰る母波を更へ聞て
あつても方の長き三人より乃大長口とありなりや
出るやうていふより小姓は同儀石はさるるより
つく右より見へる小姓を車切り切をふり又是人

明くも打る際小姓は保へ丹波方の者より押御を
いふより母波より不妙打留置るより比へ所人も
あつても事の義を好くより悪く事ハまじくと小姓
此小姓ゆかり理不盡り志し所由の者も悪めり
由くも母波ハ親の方より眼前より我子と大概
切も誰もかく有へる事元来尊極なり人知れん
こころの如く稱美志る此を更字のより上るも
古今よりあり坂田金平とよりを結りしより
日本より紙のあつても事先より路へ凡金平乃
よりより時代より津雲丹波を更へあつて結母を更
ゆる御肥前太夫土佐を更へ外記を更へ半太夫式部を更
ゆる品人ありとも是れより母波父子より及

と云ふもあつたまゝすし付丹波いふはくさぬりも物なり
不礼千五百也を念ゆらむ一集相も成り極つて
いふもあつた古志左徳義と首と尾只成つてて樂を
いひ人揃へて投かす一景景いふと向ふよき七節と云
たまふそのをよき人く見物一乃を礼譲入人初又
たいて家少くも分ちたぬ一とりおんりておらり乃
るるまゝく家少くひ人のあふぬ一な徳義も喧嘩お
ふくいとくさへ一愛もて用捨て給とて鉄柵毎く
おん金平と語りあすを叙くおこの者ともと合を扱
いさつものる遠く成り一うらた成り中もおん徳
かよとてたまふむら一語りも出ぬる
差の市節と云ふ事

夢の市節と云ふハ江戸男ぶての一二と云ふ事
者もはゆらむら一元吉原よりく大喧嘩りて大門
はあゆめ女家所へくともと血食の者とも切合ハ
市中若れ市節を無事くく大小を帯一あつて
端綿乃許巻少く大門の上へ登りてをく人者ハ高
軍人差の市節と云ふ成り大門を叩くは音也お下り
乃方一坊を付く前後海の中ゆら一傳ふは昔乃
半少くは喧嘩の合ハ具一お初ハ不ハ忘る一あつ
大喧嘩差の市節と云ふ節少くお海中人よ一性ハ
これハ享保十年の前後、海老丸、園十郎の節
差の市節と云ふ物言、一節と云ふ節少くは音也の
道鼻だて大門を叩くは音也一ひきあつてはむら一のいふ事

湯くしもの尻の英徳ア控ゑよといひし人も立後チ
切道キレミチしぐなう原の戸ありし時乃事ぬり
登るより客いすまく一と長月暮ふのころす
客我ゆ一ハ其節ノ後ノ音ノ

鳥もぬ一テりさうノのきぬハ
うハきハしハ一ハ英徳ア控ル也

かよふ事ありしとて此の事なり市部シ
常事ありしハ何れも此からいへくゆハ
さて其後所方の有徳成者集り其言を打く
日くぬくささりふありりり浮世せしむ
寂明院シ山伏ありし是も其言今のふくハ度ハ事
すこしカ言ありし海も何事も私まかりし

其言も負ふといひしりりり喧嘩ししはけ下原
打の扱乃二尺を臥す有し願上物を朱鞘シ
うらハいハしハ一ハ海ハのハめハさハ日ハくハ其言ハ事ハ
さこそ人ことと人ことと也り市部シと右の者
其理のふくと結る市部シ其言ハ事ハとハあハきハ也ハ伏ハ有ハ
との舟と河と糸と一ととある時其言の今也
市部シ指ハひハまハとハ括ハらハるハ志ハくハ有ハとハ其言ハ
おいてくさう時ハ朱鞘の山伏ハまハとハ其言ハ事ハとハあハきハ
此の緒負せん世英ハ何れも何の其言と何ハ
打ハるハ人ハ打ハりハいハしハとハあハきハとハ緒負ハとハ其言ハ
ハハ寂明院軍と云くハは其言ハ我言ハハ
そふらハ明日勝負つけ終り一ハ我言のあり

勝負いふんと打つて一勝負をつき消し市師あつ
言成んぞと戦ひをさへんとあおひりん伴の碁盤を
たりのもそし角の方と菱とつと持さす人たり
くく見合居たりりり時よ市師あつ是山伏汝ハ何
者あれハ我亦印ぞく打セハ碁をさすすお礼を極
たりの碁盤をとりこのやくと遊せしり山伏軍て
さして世ハハあうきや川、有よの神寂の虎を
あつとや不勤の利根をぬまりんと来さや乃
根をぬく市師市師あつをあいすることく
山伏ハいつともぬり廿汝ハあふかーお礼は借
あつ我けつるよよらん山伏よあのれつん、我
りあつとむとあひふハ後日はふくく買ひん

由のれあのれハ此の碁此勝負あひひつしといふ
あつらつこれあつら山伏只今汝をま海海す市
かつりあひひつし新そたの、我亦印、来らるる
銀ハも付かつてつとを今ふとそをなと返さるると
首のぬらつとふゆらん山伏をひつはんとやそ
城よりあへ投おしさつらぬ新とく居たりりあ
皆くおを消し城しくとおひちと市酒あつと
ああらん、之少地をす市師あつとや山伏めが
我あつと、かき、有よと酒をく、若く、由
あつひりもや山伏めもあつと、つと海りりり
さて寂明院ハ、そをな、あひひつし日市師あつと
入が海つと、市師あつと、ぬと、市師あつと

くぬくハ白眼と云ふ事
金剛夜叉のこころ

山伏言を言れ働かむと云ふは伏し起す市師と云
少くも付くぬく事お山伏人をたのこ日本一の
長者といふ市師と云ふ事あり我々の下打と云ひて
向ひし市師と云ふ事あり白眼と云ふ事あり
ぬく刀と柄をもち動く事ありありすそ石乃
どく誤り託言しと初を言ひぬりあり

さて又禁裏の角力も事あり丸山にまゝと云ふ
カ量人なる稀あり大カク事ありと云ふ事あり
持るハさしと云ふ事あり海海と云ふ事あり
して大昔と云ふ事あり人の間ハさしと云ふ事あり
横と云ふ事あり入る事ありに事あり角力乃

の事なる人なる事ありぬく事あり及東西名譽の
角力日本一乃勝負と云ふ事あり禁中の市師と云
ぬくの事ありと云ふ事あり渡り人時と云ふ事あり
ておとありと云ふ事あり市の市師と云ふ事あり及
ぬきの時角力日本一乃名と云ふ事あり有るの勝負ハ
是と云ふ事ありぬく事ありぬく事ありぬく事あり
日及しと云ふ事ありぬく事ありぬく事ありぬく事あり
ぬく事ありぬく事ありぬく事ありぬく事ありぬく事あり
相おぬきなり市師決定乃おぬかぬぬぬぬぬぬぬぬ
禁中と云ふ事ありぬく事ありぬく事ありぬく事ありぬく事あり
すぬく事ありぬく事ありぬく事ありぬく事ありぬく事あり
市師と云ふ事ありぬく事ありぬく事ありぬく事ありぬく事あり

志賀^{いしか}は只今角力の勝負ゆり負てハ江戸へ歸る
——と云々借せよ、我も少し回ふとくし勝あつた
此等の事、角力にこそは必すこゝろ主折るべき
市に歸り後の如きも見る處しとてさうさ
り、闘ふ世やうて角力ち合さる、浩ぶ市、良場とかく
付也。仁たま、志賀のゆとす、何と拵上投あすあ、也と
おのち、志賀のゆ中少く、わたり踏たを——ち、伽羅
門、ちかき、あつた、丸山にたま、山の岩をく、こく、
打さう、わたり、堂上、おす、一、何と、あ、さ、何と、わ、り、
あ、たり、や、志賀のゆ、あ、く、く、つ、あ、ち、あ、ち、あ、し、志、賀、
ゆ、ち、ち、何、有、つ、こ、れ、見、日本、角力、の、人、人、く、目、下、開、山、
ゆ、ち、志、賀、の、ゆ、と、為、善、の、編、目、ら、さ、る、藤、ん、ん、と、
从、裁、仕、は、合、今、一、各、と、上、退、あ、す、る、あ、れ、す、一、何、り、よ、い、り

丸山より、只者とも、志賀をぬく、さ、が、し、何、り、す、る、と、
市、常、あ、つ、ひ、あ、ら、う、一、單、と、勝、ち、甲、の、法、と、志、り、ら、と、ハ
こ、の、事、あ、り、ま、ら、ぬ、を、有、り、一、何、り、海、を、と、さ、
志、賀、の、ゆ、と、志、の、く、也、お、申、一、京、都、を、ち、せ、京、都、の、
あ、ち、ま、あ、つ、と、さ、て、言、く、一、志、賀、の、ゆ、の、初、海、屋、茂、ハ
と、して、P、の、ち、何、城、一、目、下、開、山、ゆ、名、志、賀、の、ゆ、と、他、
紋、し、し、と、志、一、何、編、目、さ、り、死、場、の、名、城、を、
成、て、半、ゆ、ふ、く、何、り、一、何、り、ち、あ、
ゆ、ち、あ、つ、上、方、より、異、名、城、今、あ、ち、と、し、者、何、り、
胃、行、違、り、紙、ち、し、あ、ら、と、し、一、何、り、書、さ、く、ゆ、ち、の、後、日、の、
か、め、す、す、何、り、と、し、一、と、性、し、吐、を、何、り、市、常、あ、ち、
余、の、ち、少、く、あ、ら、を、格、別、男、だ、て、の、紙、切、と、ハ、か、い、と、し、

い——市商の集りあひては川上りり田舎へ出川
らり田ハ入川を浦とていふは田舎の田意して川上り
南へ行く侍者やと申すは旅人今午を又とりふ
者りし一人く申す通す言ふは成りぬりぬりぬり
今午を又とりふと申すは川上りぬりぬりぬりぬり
田舎の田意して言の市商を信と申あり単ハを又ら
田舎は連れりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
よらぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
と申す時、今午を又とりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
市商の集りあひては川上りり田舎へ出川

酒の西へ糸とりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
右の酒の糸とりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
由他人様子有久らぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
小と申すは言ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
しき事と申すは言ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
みぢんじぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
ある者習う花たぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
う一語し世帯と申すは言ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
と記し世帯の事と申すは言ぬりぬりぬりぬりぬりぬりぬり
市商の集りあひては川上りり田舎へ出川

いそ元と相列田村の田舎一軒込をいして是乃
放泊四師を備お果人と聞くとおひおひおひ
食事もと苗の佛前に向ひ自滅しては悔い
大淫戒者やや

腕の久ハ親寺坊のま

神田次田町と腕乃久ハといふ者ありは剛強
男侍をくしはなはま喧嘩致し及に寛文の初
吉原北土の道徹乃ありし病者あり及に
体振る刃束のくくかくのくく貧窮多病乃
者小くあさい何とては慈悲くくやく殺してたまは
のくくくく神をすあると死久ハ吉原一軒にけり

をを字さ回くく死くくおひくく扱女とくはて
急す刃一とく及んよと合せ何とてまねんといふ
久ハ金亀山前まく五廻り饑饉寒多調々人の及ん
あふりり^也新をんといく死ま^也何とてくあふくやく
死^也くくあふといふ久ハ其れをり吉原一軒あふ
更扱ハツのころちよとくしてけすこ一命ありせし
かの及ん堀松のさか下一立寄久ハ来りて是の及ん
者もやと叫まんちく^也者といふま^也傾流^也ても
く^也つとありひりい^也く^也身^也もく^也拵^也ますと^也き^也り
久ハいやく死^也死^也といふ及ん^也字^也く^也何^也く^也も^也と^也あ^也く
死^也く^也く^也といふ^也死^也久ハ^也志^也く^也を^也親^也念^也せ^也く^也登^也り^也く
大眼^也く^也と^也す^也り^也ゆ^也め^也く^也及^也ん^也是^也く^也く^也志^也く^也小^也字^也成^也

お川にけ装束をけしは切らさす 雨もくすじし夜乃
信乃より切らさすあまりんるも切られは自ら禰美
しと此服さしと信夜と云はく秘蔵しるの好年
久八世伝法神しとくりり 是は柳原急の武家
方此小姓明草しと之理成事伝中けしは是れなく
其者伝傳門前少く打と控立の記さすすは
りふら先軍付する是傳中留四丑人記さる追々
小姓此しとんく次田町の各名乃内人切やすすて
くを打し者もく此元人土那くみ紙中夜人少のち
傳りくしと下れりしと中打やし久八入道名記さ
基成打始りしとん坊さるいす少人のゆめのみ
おのり傳りかくしとをこれくと土着乃中かくしり

不どぬく追々来り此後少く少人の入中れを記さ
見りゆり人を打くふく不伸者く出は人とり
各々の家人と見此言ハん人といふ追々の者も
志しと家内ふ妙尼平といふふれ出らんといふ
母も由障子を記さるる見せり又又記さる
追々二三人来り土着の内をさうしとんといふ
久八入道記を坊立と云く中やとてむいハ
むしやくぬらんといふしぬり人を討し者と中
さる、敵家内ふ妙尼せ中人又上家さしとせん
追々し及び健をわけんふく中さるハ折る人
世家入ハ所の各を成と今日笛を少く人年ころ此
法師し笛を成す也和すれ是しあり世法師首ハ

腕乃久ハとヤセー一者あり今観音坊と云ふは生
祿のひく土着のけし狼藉者かつくは一何よふ
かこし中く人や此よもも者く軍分ちく土着を
おろくおろくをくつ成と但一回く成とをく
入るもく小姓ハそくて土着をゆめやさく
苗とてけり此観音坊おち中へいさや土着へ入
有毎一市内ハ土着の戸前切と云りや
依本利流乃大身此種とがまくとに主とく
八面とくひ一有るは足腰中間大く言と
小姓工着くあぬ時ハ法師ハ分り
腥不書成去くといとかくす
是少く人中人の

家内を不沙尺さるの戸と兼せ一と利ふして立
通より物頭やの者もまき一足物とも一回く
流切く途入とや下まき
より大井極の下まき
さるは遠とや途入と口を
ゆりりおのり小姓ハ上那く
重く礼とのぐ家内一不
仕立すそく小神を上下
いふ小神平と人を討く
小神成下と志留
此法師を送り
是唯ふと花やと

のうらさるゝ死出の心乃連しと成りへしやうり世乃
小神の海より立ちあへしとすし小神此言なり飛入
れとめちよはるの小神あゆり力のくく見若る
まの智中人何しし未練のいさあめくやとゆり乃
こしく心出るとは原んといさ死しととむりの
のれ衣と名をかかむせ換へ上野の一条院へ
はぐめく送り布けと改りり

放駒四命を傷く事

くぬれ駒四命を傷く事此市命を傷く見ふく強勢成
者あり度く留名とより山城之志とより目明し
大分限あり者し意趣ありと巧とくぬ右の百徳

たる人を宰言しとせし是を放駒四命を傷く
小く記はしとやとく之とく口論去りむの打は
あつりり之とくも傷よとハ不叶名よりり申意
しと放駒めそひりなり前乃ぬひ會新り
先をまき外り四命を傷くと待若よりこくよをぬれ駒
怒意成所と力の見あり乃宰人院中練く忠と
いし人世換子年知りりれこハ四命を傷り大車
共とおひしと放駒と立向ひ二階より名別あり山城
之志と名よま娘ありとく打をいさんとして待若り
まの海よりしとより四命を傷くこハまの命のお言なり
とてまの人四命を傷く言流せんと待若と年く改りま
中ぬく人やとく四命を傷く年と二階よりとく

んぼりり〜と切回筋着う首へ切け 踏子の横ぬき
切えつ〜人首中からと切〜を四筋着〜と〜もせず
眼さ〜川ぬき〜を切伏せ〜り〜さみの〜云訴
あき〜いろくの者とと大階池あが神の本屋のと
敷をつ〜す〜疾も乃方回〜るあれハ何〜少
田〜少〜あ海〜路〜〜世産の者〜〜く難儀
あり男及ハ乃方あ〜いろ〜と五あ〜ひひ分
少〜相海〜り〜と〜ハ〜〜の中あ采〜ハ〜疾
少〜〜中〜少〜〜

〜後品川〜鐘馗ハ帝着〜りあ出来星の喧嘩師
出現〜と評判あり去る者ス〜ち打の由め能去
太ち〜り〜向〜〜品川のハ帝着〜云ハ

節し〜ぬ者〜一言〜出〜ぬき打り人つぬき
い〜〜〜品川〜一時清系方おひひ
ゆ〜〜〜ぬき〜ハ去る〜あれ約
四筋着〜おれ〜〜〜
〜〜放駒回〜〜一時〜切〜
たち〜の〜〜ヤ〜〜ふとす〜め乃あ
打〜あ〜〜鐘馗とおひ〜もあ〜す
や〜〜真の〜〜鐘馗とお〜
色悪く眼大く眉毛ぬ〜〜と六尺有奈乃
男大〜の〜三尺〜と〜
身〜飲〜面を向〜〜
足〜の〜押の〜〜鐘馗と〜

おもしろき退くしする其時放駒四節義中や〜や
をちるおのれ一寸も動くふ場所〜二里〜
来と〜ぬや川〜足〜あいさつ〜
其節高〜是は似ぬ放駒四節義成と少し
おぢんと一打と抽〜目と放駒〜
つめ〜ハ節義い〜ん放駒〜いとの〜
おめ〜是と川〜待〜長〜
〜放駒ぬゆ〜待〜鐘道〜
其を〜時〜時〜ハ節義ハ〜
所〜ハ〜放駒と切死〜
〜言〜四節を指〜
〜四節義や〜ぬと放駒と指〜
〜

近海の上ハ〜て納〜鐘道〜
あ〜川と立〜
ゆ〜馬場〜板垣〜
た〜酒の止〜我ま〜放駒
那〜馬場〜本〜大金〜
中者も〜酒の〜
訓練乃〜節の〜
かぶ〜あんと〜
放駒内〜戸〜
候も二三人〜
存も〜放駒中〜
形も〜何者〜突出す〜

我をかくせん者有るをくすまかよふぬくき者
何としかや川とありぬハ四節を無平とて天り下は此より
我まじし者ありと梵天へ軍人とて帝統乃あをせと
かくありくまのよ通り天よりあぬらんし放駒
四節を痛といふ者たてし帝宮あきぬひえんき
此よりまき右の者とも呼射目平を刃の不死ともて
右のや川まき右の者とも呼る追身所をわたり
せんぎさせんといはる此の介まき右のひいさの
まきの師唐くぬれハまき右よりハえより博下中
一回ハ此記の中よりまか山目下より少飲立後若氣
日及しし師記ハまき右の山平をぬそハ申く
えり下よまき右の山平をぬそハ申く

右の者ハつらくを考へる日とひもよぬ師出之成ハ
まきの相言しハ上より少くまきあえし追身右の師
師記ハ参上してはハ大勢口くし放るく通りとの
こがししハ上よりまき右の山平をぬそハ申く
出く、まき右の上ハ我ハ通り天よりとせしり
まきの通り者の日あきといはるまき右の山平
酒ハせん少く大記大は整ここのの花まきあより
おも放駒ハ山川少く鐘道ハ師を呼といふく名を
あけし一毎年とありまき右の山平をぬそハ申く
腕乃まき右の山平をぬそハ申く
兵者あり山の山平をぬそハ申く
氷上新々まき右の山平をぬそハ申く

意五節 茂嘉奴子治嘉々妻

あゝ五節 茂嘉ハ元来本控所の生れくを好けは
強勢なる男少く詰り回只今何れよの事といひし
そし一の男匠一と見ゆ水庵くやうしあ者意
前々軍及見事人曾極乃やうし辰く死せり
たましく生事抄しるる老人あれと喧嘩あけり
本意も成りし事此ら増所多し奴子治嘉少
中不誠を此の男あり是未ふくおひ一猪原
いたされく名ひきやうしと意五節 茂嘉
軍といで安記事なりしと意増所一けり
そや永開き君の前より治嘉と見し喧嘩と
志しけり中意よりけりやの治嘉二二りあ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

のき合踏みとく治系、股をあらう切こはいふ
おのりふく内は治系、股を切治系はあふ川を合
す内人も互易とやうくとり治系を川のく
治系もすすすに治系ハ年し小増る男
たりおのりふく色けり成す一と底も余後乃
事しと悔くす川宿く悔く悔く一治系も此場
恨ふ一宿り悔りて治系も一宿りありす
少く其分少く川に水より治系いこのゆか
治系も不及て有りやとり者多く何れも
也、治系も治系をあげハ女子治系を仕付し
評判あり治系ハ右の股乃底いこのゆか
このち口股とも治系も治系も治系も治系も

おのりふくかくハ年し悔も治系に込すくと底
治系いす一快直せハ年し治系も治系も
と誠と治系も治系も治系も治系も治系も
めと治系も右の股を切治系も治系も治系も
又股を切治系も治系も治系も治系も治系も
おのりふく治系も治系も治系も治系も治系も
時く人しとせたり治系も治系も治系も治系も
勝負せんとしも治系も治系も治系も治系も
たしと治系も治系も治系も治系も治系も
治系も治系も治系も治系も治系も治系も
勝負し治系も治系も治系も治系も治系も
死換と一年案待と治系も治系も治系も

あつし若者さとしとらふかそきあくとる敷
あ人と見えたりふしし一々事細くはく海くも
念比しとせりり惣しと成る夜くの喧嘩り
矢のり紀者し神田のゆ律下ふしと相子大燈又
かちしと開る綿糸の大眼しと少く晴成と抽波は
半人しと成成に乃吐るしと南の六和年中朝鮮人
来朝り言成るも品川へ足物しと糸品川口こも
か込合しと下官唐人を人そぬれと馬士とり
什派来しとふと後のとるさふと人込合の唐人
ふと糸しと足る成糸とあつと成糸いり足げ
あひしとあひしとやあつとつと朝鮮人をいし
あつと糸糸糸とあつとぬりしとぬりのあつ

朝鮮人をあつととらふり子田人としと川のけあ
馬しと糸糸と馬士と成りしと中ぬしと流人言の
者つと大分成流の解く事廣くといしとあつと
出来てしと刀方の大難成た人しととらとぬく
付来しと奴の供ふとぬしと成成とぬと田舎乃
生研しと涼りふしとせんぬき事とよしとばさ
しと糸糸とぬしと馬あしとやとぬしとら
更其乃吐るりりる種字の滝口者なりしと
你川しと糸とぬきしと生あつとら
羊鐘はあつとぬきしと喧嘩の事
延寶三和のころ小出信濃守友以男しと小出告ゆらぬ

よく知り五十石より二千石より大徳家あり人ありか
水部十部屋敷のこしく大伴連者の大抱ひぬし
本家分眼なりぬし父母乃御あし子少く金銀存の
こしくをを御抱山とらりし日をくされ人ある友
土用千七人とも貝足甲入し鎧櫃と浅草の田町乃
糸屋とく持も糸屋より甚身ハ細威の遣を伝
紋円金糸糸とくかの者とも貝足是是糸又ハ下濃
いろく少遣忘也真乃大カゆり制之揚金所ハ
川之邊之申の所少く此酒盛のつしき出とら
道盛よりつしきつしきもくやと目代あつとせり
とく良人し此男たてたの半しとる盛者有呼あ
川し物をもく浦をいを信よりくしと御ああの

鐘はれあ牙かす羊撞ハと呼ゆ金一件鐘
よれく一時も和羊時九節と此ハと出九節と
後羊撞立たあつとよきて中鐘ハととる山と
是も是務あ乃鐘現者目くやとつと者とのと
いし女節の盡りり口論はか喧嘩とあさる
あつと石扱兵ゆハあ少水者も切合あやま
西とんくハよりい樂いとああく此とハと目
細目あれし目くと思つとヤセしとえ来大カ
このたけさまおあつと地と痛とつとあつと
剛恩乃者あれハ重串ととととと喧嘩乃
聖鶴川から川とあ人合とととと切合と
ハを切もやとと左カ切すハととと切也

こを此穂柄貴とつて俗いしぬし之の事あり
ぬく切きとて之又ハたを切し小鬘らかけ打し
泣きこゝ切きとれとこ一分も切れずハたゆたりと
切ともぬし文少きおのやと切す世に絶せし
指しる眠るハを是比情愛乃片小く資し物
此も又いし人々後々羊人ハ體身をかりし
連し小おしり片かゝのこゝハた運くこの道
たれ又言ふとくぬき思胃くぬ物なく切す
半く鉄乃指中く打合こく勝負つとて吉原神
方とくり知る人も出合ひかぬ抱す小出せぬ及
軍たりしは是ハまの子才とも物下り不敵乃
者とも呼向へ酒盤せし片づり経りし喧嘩し

いよも乃方ぬきとせに運く命す世ハはく
こゝろは紋内をこゝろとありて双方の底良將ハ
元よりこの用事金銀もとと兵ぬきのふりし
大方にこれ兵物との師のいといらくことと
倫も人貴人の名もふとふふと喧嘩お麻ハ
さしハせハ日比んとつくとゝあらん世に
おのし人衆ハ首とれし羊漬ハ高曾極あり
老敬ありさふふの谷とて場吉原乃人多
来るとお抱あくと首尾くととくや世と羊く
出来星甚と品あり

ハたつとほの左刀はしけし
めろとせハ羊一羊一

鯉の源左衛門の事

むつ源左衛門ハ神田目家傳系、才、其比
泉町へ出入比丘尼、おゆきといひ、川條邊に
夫婦、成天和の前、乃比、時、比丘尼親方、おま
方より、おゆき、一、二、三、夜、の、初、を、い、ひ、せ、り
源左衛門、是、を、念、を、お、ひ、と、切、り、死、せ、ん、と、友、達
成、し、奴、子、の、小、五、郎、を、た、の、こ、と、出、り、小、五、郎、を
軍、と、例、乃、い、つ、者、の、事、お、れ、ハ、お、ゆ、き、男、と、ま、は
さ、お、切、込、我、も、傍、に、切、込、い、ま、や、足、場、を、見、し、と
源左衛門、と、打、連、大、工、町、を、り、打、ぶ、い、ゆ、き、親、の
お、ゆ、き、お、ゆ、き、安、祥、院、母、く、此、お、つ、り、美、女、少、く
女、あり、北、條、安、房、と、女、前、少、く、比、丘、尼、の、出、入、り

ゆ、き、の、事、ハ、切、込、の、者、成、一、其、日、ハ、む、き、記、乃
御、二、重、の、小、袖、を、お、ゆ、き、と、決、り、し、ゆ、き、お、ゆ、き、り
小、五、郎、を、ハ、ゆ、き、も、と、成、し、表、裏、を、切、込、と
中、も、敵、ハ、お、つ、り、今、切、込、と、小、源、左、衛、門、の、ゆ、き、と
兄、目、家、傳、系、の、ゆ、き、お、ゆ、き、一、石、堂、乃、眼、子、
川、ゆ、き、志、向、を、お、ゆ、き、と、切、込、と、ゆ、き、お、ゆ、き、
小、五、郎、を、た、の、こ、と、復、打、ぶ、お、つ、り、首、出、し
たま、す、打、落、し、ぬ、く、切、込、と、ゆ、き、近、女
り、安、祥、院、主、席、十、五、七、母、乃、切、込、と、ゆ、き、
而、新、し、ゆ、き、お、ゆ、き、何、れ、ゆ、き、お、ゆ、き、安、祥、院、ハ
日、次、兵、法、統、治、御、切、込、と、ゆ、き、お、ゆ、き、
源、左、衛、門、と、ゆ、き、十、位、高、了、志、の、ひ、お、ゆ、き、
源、左、衛、門、

と死にまゝ思ひくくしに戸一あり若安祥院
出合しと首尾しうらひ討てして近一
神田一と母を抱ひしうある付源を命を乞ふ
負て眠さしと嘗ての打をさし一室八女子を竟の
ためあつたる方一切そと兼相成古眠抱を信
懐とぬきにぬき安祥院乃付白壁所安尚原妻の
前うへ安祥院ありを源を命母のけさのさし
切しける源を命思ふがきめりそて眠さし一寝りあり
を命とおひけしき成し一を身を三人之四寸さりの
而て寝るる具して安祥院あ人少くかのよれいと
夜切しから源を命一石口合さると柄をけ柄糸と
をうへく少くかごけ鉏花眠さしと取あすあ人ゆらりと

諸込く切身りさしよの源を命うぬくつくとやたる
そらりよあし成て伏たりりり孝心の事ゆれが
天ものくも世有しり源を命之懐をりて寝しりれ
を後中上源りり小五郎氣ハ是を平のさしと上総
うりゆり江戸のゆりしと看たり一を後有者つらさる
身の上江戸一をさしと尋りれハ小五郎氣中ハ
安祥院新伝し相子難の源を命女石口奴子の小五郎
を命と中さる志るあしあとの源を命運つる安祥院
討て敵打お誂たりをさしと出入ぬし一志し安祥院
小五郎氣あも相もとおのり勝と志の勝負してゆ
させんとな江戸慮くありしと語るをさしと可たも
相違ぬしとぢさしと半鐘共なき定ゆくとさし

丑辰其も久しきこと成しと申小止命系後ハ相刺
梅匠より行くと帯深と申

小止命系あり一り世ありと云ふ所ハ所ハ取御乃
師是也其時乃疾も凡中ハ余福乃疾も凡小止命系
切合小止命系も大疾之四テ不負申し師是也其時
半死半生一切并道場を仕廻り申し大いりり者少く
其時乃疾も凡中ハ余福乃疾も凡小止命系
七十四五と云ふの之に式式天武余の刀在のふふ之
いりて申し申し小止命系一と眼さ一と多々帯の者ハ
申かりり一と申し其さ一と東海を乃ご梅の
魂と下ふいたや一と申し自慢り一と申し世ハ

柏崎市之り事

柏崎市之り上列の者少く能百姓も之を以てハ田舎も
其性もやうくも上列の者少く能百姓も之を以てハ田舎も
其盗も亦く能くも上列の者少く能百姓も之を以てハ田舎も
名とゆい能くも上列の者少く能百姓も之を以てハ田舎も
奉州一と申し國の事ハ申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し
其近かつりて申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し
りやと云ふの金子集りて他國せんめおひくと二三日
年亦多し身の上事と申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し
其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し
捕人をとせしれん元來市之り申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し
其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し其も亦申し

花村庄たる中なるハかしのくくのみ者御石捕あられ儀
りく事と存別々者と業内く西親あそはうれある
屋くとも命すられ一懸危小なるのりもく向いて
切つらハお留てもる一かすすといはれりて
そくくするあまうきくもの者あれ鐘はたつ
中にて之れ乃便定者く出たるとり言物をとゆた
御まのく事年推され軍及一甲のくめけの科人
卒亦く有ゆり海子ら也悪常猛の拍子市を
よこのあたのくく事小悦ひゆ下の者く扇魔十系と
し者引連回く流一市く本庄おのびく市なる
世給ふ川魚人けんそ有し西成と出しり向なり
鐘はたつかじくく出さく廻回くともくさく我

たのくい居るゆたあきく家の事あれりあきかけ
ゆたあきく市あつてゆたあきくといさとも
ぬくんとく市をくやんぬらつてかきめき持持者
ゆたあきく二人之守のよのけあかけむく日く扇魔
十系あかけ方あくくふく給す市をくあきく
あきく市地をハ御く儀林市坊を流の店がとく
右の市坊を乃下男麻屋の在々の者く世市なる
をくらと儀し出入く世留く角目かきをてん
成りりるあけあきあけよ出是とく田舎者か
何とあきくすぬと切名の喧嘩あくとくぬく國凡
ひいさ強少く指をりのと向きよか指の子き
そりかろ扇十系と側あき清へなるとく廻回く

この處ん碑す母ら死し打拂をす所なる若き
一打と知らる伴の習身とそむけし所なる若き
あごまおよあごらる切是なり七八寸わつさと打お
を向よ市なるあご成りす一と述矢り所なる若
かゆとくを男と引從打伏なり高戸も同い流もたけ
うさぬりてねえ儘をけりるさてすの女ハ何者成そ
只今の者ハ所ハ儀よりの中尋り科人し捕りし所
役儀の我こよもむふいふと思とくすをとり男
強きを儀ぬくし所免れしれ下さく人あめ者ハ
二三日以前より私止所の店の日よあご人あご人て衆
者ハ力六あご打中あごるんあご好んく日國りて人
あごるん一あごあご思を思合くよ述しそらるの

しんをりとりんるのハる扱んとす平人も事急
かちけりる石是ハらくせきと取遠あめりす石の通
は合少くも所存海川ひりり所免下れへくとくりり
人こあきれくせん家る人れり人つと所是所平あ
あごく述く急くうり中計ゆりりあご述く述系右の
あごいお遠あきり伏し不中千あ所男不親法やき
やごふ一里の所儀の役人一人白のせん人し可れ
も能少くあつ若き述く所吹味の上章述故り
成り所なるハ々度の事したのよし下面目と思ひ
不思儀のやゆよきられく疑き一腰抱たり
りり

後文

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used.

Handwritten characters at the bottom right of the page, possibly a signature or a date.

A small handwritten mark or character, possibly a page number or a section indicator.

Handwritten characters at the bottom left of the page, possibly a signature or a date.

